

【資料紹介】袖珍本『南里見八犬傳』略解題

山 本 貴 恵

袖珍本『南里見八犬傳』について紹介したい。

近時入手したこの架蔵本は明治四四年八月十日に大川屋書店から発行されたものである。

まずは大川屋書店について述べておきたい。

八木敏夫編『全国出版物卸商業組合 三十年の歩み』（全国出版物卸商業組合、昭和五六年六月）の中で「大川屋の活躍」（三七頁）と題する部分がある。

それによると、初代大川錠吉は深川で貸本屋を営んだ後、明治三年に浅草前にて出版業を開業。

その後、「たまたま講談の活字化を図ったのが図に当たり、一世を風び（ママ）した菊判講談本時代の実現」をしたという。

二代目錠吉が婿入りした際には、「大川屋にはすでに七、八百種の出版物があり、「当時卸店はもちろん、露天商、高町商人、各地の小売商店では、大川屋の出版物を扱わないと商売にならな」かったそうである。

大川屋は「信玄袋に見本を入れて、九州から北海道まで書店回り

を行った」というから、全国津々浦々まで広く出回っていたと考えられる。

しかし、これほどの隆盛を誇った大川屋書店であるが、今現在、その存在は注目されることなく、すっかりと忘れ去られてしまっているようである。

以前に以前に拙論「【資料紹介】大川屋書店版『里見八犬傳』略解題」『研究と資料』平成二五年七月、三九～四二頁）で紹介した資料は、ここで言う「一世を風び（ママ）した菊判講談本」である。

その本の奥書を見ると、明治二六年初版発行であるが、明治三六年の時点で十版を発行しており、大分版を発行していた様子が見受けられる。そして貸本屋の所蔵本であった形跡があった。

つまり、より多くの大衆を感化したのであろう本の一つであったわけである。このように広く大衆に親しまれた資料を研究することは、「八犬伝」受容史のみならず、近世文学の享受史、ひいては明治期における文化研究に寄与する一つの布石になるといえる。

この度、その貸本屋所蔵の菊判本の後印本である袖珍本を入手した。現在、これほどまでに隆盛を誇った大川屋書店が忘れ去られて

しまっている要因の一つとして、資料が散逸してしまっていることが大きい。この架蔵本二点の資料を考察することでその資料的価値を再確認すると共に、広く大衆に読まれたであろう「八犬伝」とはどのようなものであったか詳しく探っていきたいと思う。

○

まず書誌を略述すると、縦12・8センチ、横9・5センチ。

最終ノンプルは三四〇である。本文の一頁前に口絵が一枚あるのみで、挿絵は存しない。苔色のクロース装丁。巻末広告を見るとポケット形と書かれている。見返しには、図案と共に「文庫」、「曲亭」、「馬琴」の印字が散見される。

冒頭は「抑里見又太郎義実が安房に起るのははじめを言はゞ父季基ともろともに結城のしろに盾こもり」と里見義実が落城の末に安房の国主となるまでの由来から始まっている。

末尾は「里見は房總二國なれども十世に傳へしは（中略）民の是を思ふ事深長なりし所以なるべし誠に美談ならずや。」と八犬士が里見家へ集結し、里見家が安泰になったという下りで終わっている。

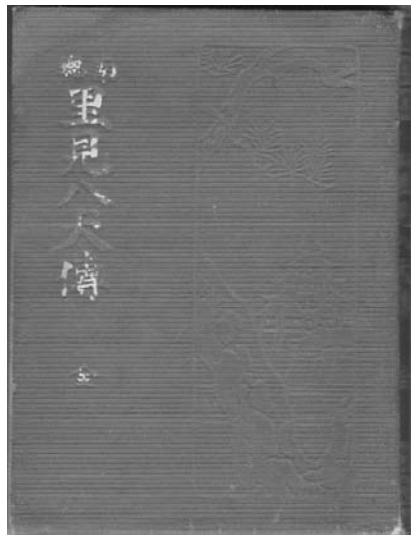
ダイジェスト版であるが、とてもよくまとまっており、全体の粗筋がよく分かる構成となっている。

それぞれの八犬士の話や主要な登場人物は省くことなく、まとめられている。敢えていうならば、八犬士の犬坂毛野の段が少々削られている箇所もあるが、あとはほぼ均等に盛り込まれている。

この本を読めば、八犬士終結までの一通りの話を理解することが可能である。

また、原文の言葉をそのまま効果的に使用している箇所も見られる。以下、原文は『南総里見八犬伝』（新潮日本古典集成別巻、平成十五年五月〜十六年四月）から引用。

【表紙】



【表紙】

南総里見八犬伝 全

袖珍本には「…また何等のことをかいふ其は次の章に解分るを見て知らん」（第四回末尾、一六八頁）という言葉が出てくるが、原文にも「それは次の巻に、解分るを見て知らん。」（第五輯巻之二の末尾、『南総里見八犬伝 三』、一二九頁）とほぼ同じ言葉がある。

しかし、使われている箇所は違っており、作者が効果的に原文の

言葉を使用していることが分かる。例えば袖珍本でこの「解分るを見て知らん」という言葉が使われている箇所は、古那屋の場面（第四輯巻之四）であるが、原文では同箇所は巻を跨いでいるため、この言葉は見られない。

一例を示せば、袖珍本は「ゝ大が次の席に着また何等のことをかいふ其は次の章に解分るを見て知らん」（前掲同）とあるが、原文では「ゝ大が次の席に著きぬ。」（『南総里見八犬伝 三』、四四一頁）となっている。

その他、言葉の掛け合い部分は原文の調子が引用されている。

小文吾と房八が掛け合う場面（第四輯巻之三）の一部を掲げると、次のような違いがある。

袖珍本『南総里見八犬傳』

房「昨夕入江の蘆原にて 小「しかも甲夜闇黒白を別ず 房「背負／ふて
かへる一包袱 小「誰とはしらず後より 房「引とむるを 小「振拂ふ
(略) (一五〇頁)

『南総里見八犬伝 二』(第四輯巻之三)

：「さぞ欲しからん、欲しかるべし。昨夕／入江の蘆原にて、といふに
小文吾膝推進め、「しかも甲夜闇黒白を別ず。句「背負て／かへる一包袱。」

句「誰とはしらず後より。句「引とむるを。句「振払ふ。句 (略) (四〇七、四〇八頁)

このように掛け合いのセリフ部分のみを袖珍本では引用している。袖珍本の方は、詳しい場面描写がない代わりに、誰がそのセリフをいったかわかるように、名前の頭文字がセリフの前に置かれている。

粗筋が簡潔に分かりやすくまとめられていることや、原文の語を効果的にしようしていることなどから作者は原本を読んでいた、もしくはは原本に準じたテキストを実際に読んでいたと考えられる。

○

次に、貸本屋所蔵の菊判本『里見八犬傳』と後印本である袖珍本『南総里見八犬傳』両者の特徴を比べてみたい。

どちらも同じ大川屋書店から発行しており、全く同じ本文を存しているが幾つか違いがある。

以下、それぞれA本、B本（袖珍本）とする。

A本は和装本であるが、改装本である。

表紙に「絵本南総里見八犬傳 全」と墨書きされているが、それも後から書き加えられたものと考えられる。

その他、「里見八犬傳」（端作題・尾題・奥付題）とある。

B本は洋装本であり、書名は「南総里見八犬傳 全」（外題・背題・端作題）、「南総里見八犬傳」（扉・内題）、「里見八犬傳」（尾題・奥付

題」とある。

B本の現状から推測すると、A本の元々の外題は「南總里見八犬傳 全」であつたのだろう。また、後から表紙を付け替えた際に、本文前に挿絵を追加したため、「絵本」という語を付け加えて書いたのだろう。それぞれの構成は以下のように整理できる。

A本 表紙↓遊紙↓挿絵（一〇十一）↓序↓本文
B本 表紙↓扉↓序↓遊紙↓口絵↓本文

呼称	A本	B本
発行年	明 26.10（初版）／ 明治 36.9（10版）	明 44.8
書型	縦 21・9×横 14・1	縦 12・8×横 9・5
版型	菊版	袖珍版
装丁	和装（改装本）	洋装
頁数	366	340
1頁あたり	約 28 字×14 行	約 35×12 行
フォント	約 10 ポイント	約 8 ポイント
章立て	第 1 回のみ	第 9 回
本文	句読点なし。大きな○あり。	句読点あり。
金額	未記載	25 銭
印刷者	小宮定吉	牛坂三郎
印刷所	大川屋印刷所	邦文社
挿絵	本文挿絵見開き図版 11 面	口絵 1 枚

A本は改装本であるため、表紙から挿絵は後から付け加えられたものである。恐らく装丁が壊れたため、前表紙、後表紙を補うために典籍全体を一枚の紙を以てくるんだものと思われる。

その際に、遊紙と挿絵見開き 11 面を付け加えられたものと考えられる。前表紙は筆彩で八犬士と犬の張り子の絵が描かれている。

A本とB本は同じ序、本文を持つ。

両本の書誌を対照して示す。（上段左図）

A本とB本と同じ本文を持つ典籍は、同時代の典籍を広く見渡してみても現段階において、管見に及んだ限り見つからない。それゆえこの大川屋本『里見八犬傳』は孤本といえるだろう。

吉沢英明は大川文庫について「講談資料」――尋ね求めて三〇年』（『日本古書通信 第七九〇号』、平成七年五月、十一―十三頁）の中で次のように述べている。

「立川文庫同様クロス装丁で発行ごとに色を異にし、「内容は既刊の菊判本を叢書に再編したり、上方の書き講談の版權を譲渡したり」（十二頁）だという。

そして、既刊の大川屋本については「新聞・雑誌連載から単行本化される例が多くそれを集大成したのがわが大川屋である」とし、「速記本は版權が二転、三転し最終的には明治三〇年代―大正五、六年前後のいわゆる大川屋本で終る」（前掲同）という。

既刊の大川屋本の特色については「菊判で紙装、本文は粗紙で二〇〇頁程度、派手な石版表紙、貸本屋の印が散見する」（前掲同）という。

吉沢英明のいう菊判の大川屋本の特徴は、頁数が少々多いものの、ほぼA本に該当すると考えてよいだろう。もしそうであるならば、A本の改装前の本来の表紙は、派手な石版表紙であったと推測できる。さらに、A本は「新聞・雑誌連載から単行本化」されたものであり、B本は既刊のA本を「再編」し文庫化したものであるといえる。
(前掲同)

『全国出版物卸商業組合三十年の歩み』(前掲、40頁)によると、一世を風靡した立川文庫の前に、大川屋は「大川文庫」、「桜文庫」、「八千代文庫」を刊行していたという。それら「文庫本時代を先駆けるシリーズが刊行された」ことに「呼応するかのよう」に大阪の立川文明堂から「立川文庫」が出版され」という。

見返しに「文庫」と印字されている架蔵の袖珍本は、この時代に先駆けて刊行された大川文庫の一つであったようである。A本B本共に広く大衆に享受された資料であつたであろうことが確認できる。

小田光男「講談本と近世出版流通システム」(『古本探求』、論創社、平成二十二年二月、一二五〜一三三頁)の中で、小田光男は、「公式の出版史には語られていないが、大川屋のような近世出版流通システムに基づく書店だけでない販売活動が、明治後半になって成立する読書社会の底辺を支えていたにちがいない。」(一二九頁)と指摘している。

まだ近代出版システムが確立していない頃にあつて、貸本屋を始めとする様々な流通経路で販売する大川屋の一面をこの二点の資料はまざまざと表しているといえる。

○
最後に享受の側面から考察を試みたい。

A本とB本の大きな違いは、A本は菊判本の貸本屋本であること、B本は文庫本で個人所有の本であるという点である。

A本には貸本業者によつて遊紙に貸本による注意書きの文句が書かれており、その上から鉛筆で抵抗の跡とも取れる線が引かれていた。それは「又貸ハ奈良之都の八重櫻今日御覧じたら明日ハ御返し」という文言であつたが、長編である『八犬伝』をすぐに読むことは難しいだろう。期限までには到底読み切れない読者の抵抗の跡のようにも感じ取れる。

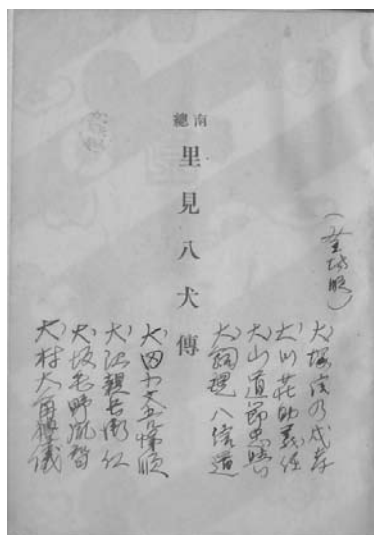
一方B本の方は持ち運び便利な袖珍本であり、また返却期限などないため、大事に読まれた形跡が見て取れる。

小口と扉には所有者と思われる印が押され、扉には八犬士の名前が登場順に書かれている。読んでいううちに忘れないためだろう。本文の中には赤線を引かれている箇所もある。(次頁の上段【扉】参照) B本の値段は二五銭。A本の方には値段が記載されていないものの、巻末広告を見ると大体二二〜三四銭であり、二四銭のものが多い。ほぼA本とB本は同程度の値段であつたと考えられる。

長編である『八犬伝』においては、殊更本の形態や所有の問題は大事なことであると言わざるを得ない。これらの資料は、その読書側からの受容の様子の一端をも示しているといえるだろう。



【奥付】



【扉】

最後に奥付を付しておく。○

明治四十四年八月五日印刷
明治四十四年八月十日發行

定價金貳拾五錢

里見八犬傳

發行者 東京市淺草區三好町七番地
大川 錠 吉

印刷者 東京市芝區愛宕下町二丁目五番地
牛 坂 三 郎

印刷所 東京市芝區愛宕下町二丁目五番地
邦 文 社

發行所

東京市淺草區 大川屋書店
三好町七番地

電話下谷一五七三 振替東京四〇〇九

○ 架藏本二点は孤本であり、『八犬伝』受容史研究の点で、重要な意義を持つものと考ええる。